

言語能力のレベル差と異文化社会適応への影響

—ホームステイをした留学生の日本語力は適応にどう関わるか—

The Influence of Language Proficiency Level on Intercultural Adaptation:
How does Japanese language proficiency influence the intercultural
adaptation of international students doing homestays in Japan?

原 田 登 美

要旨

本論は、ホームステイをした在日留学生の日本語力が、異文化社会適応にどう影響するかを同一の客観テストと同一の質問紙によって二度の時期に調査し統計分析を行った結果である。主な結果は次の4点、①来日時の日本語力は、5か月目には、適応の関連要因によって正と負の相関を示した。正の相関は上位の日本語力者ほど自尊感情、ソーシャル・スキルの実施度が高く、負の相関は下位の日本語力者ほどホームステイや友人からのソーシャル・サポートの必要性が高いことを意味する。②日本語力の個人差による影響を見るために、日本語力の下位、中位、上位の3つのレベル群の一要因分散分析を行った。その結果、レベル差により適応への影響が異なることを示した。③レベル群別と時期別の効果を検証するために、二要因分散分析を行った。その結果、多くの適応要因で有意な交互作用が認められた。④異文化社会適応度においては、二要因分散分析の結果、上位の日本語力者ほど適応が高くなる傾向を示した。

[キーワード: 日本語力、ソーシャル・サポート、ソーシャル・スキル、二要因分散分析、異文化社会適応]

Abstract

This research examines how Japanese language proficiency level influences the intercultural adaptation of international students doing homestays in Japan, and was conducted through the same objective test and questionnaire administered on two separate occasions. Statistical analysis methods were used.

The results can be summarized as follows: 1. The language proficiency level measured shortly after arrival in Japan showed a positive and a negative correlation to adaptation-related factors. A positive correlation means that the

more proficient students had higher self-esteem and made more use of their social skills, whereas a negative correlation means that lower level students valued social support from homestay families or Japanese friends. 2. One-way ANOVA was used to demonstrate the influence of individual differences according to three Japanese proficiency level groups. 3. The results of two-way ANOVA of both surveys, in order to examine the influence of Japanese proficiency according to group and time passage, demonstrated that the intercultural adaptation in Japan tended to be reciprocal between the degree of their Japanese proficiency and the passage of time. 4. In regards to their intercultural adaptation, the results of two-way ANOVA showed a reciprocal relation between the degree of their Japanese proficiency and the passage of time.

[Key words: Japanese language proficiency, social support, social skills, two-way analysis of variance, Intercultural adaptation]

1. はじめに

異文化言語圏に留学し、その地で言語を自由に駆使できないことは、第一には対人関係を築くコミュニケーションに影響する点で、第二にはその人間のアイデンティティを脅かす点で、不安やストレスの要因となり自尊感情を脅かす。言語は個人にとって、どれだけ自由に自らの意志や感情を表現できるかのアイデンティティを確保する媒介であり道具であり、コミュニケーションはプロセスとなるものだからである。

異文化社会適応の要因が多位相 (multi-dimension) に関わること (Brock, 1974; Berry et al., 1987; 上原, 1992) は知られているが、高井 (1994: 106) は、在日留学生の異文化社会適応の諸要因として7項目を挙げている⁽¹⁾。本論では、高井 (1994) の7項目の中から4項目を軸に、それに「自尊感情」という情意要因を加えた5つの異文化社会適応の関連要因について、在日留学生の中でも特にホームステイをした留学生の日本社会への適応に関して、日本語力の影響を中心に考察を行う。分析にあたっては、留学生への二度の時期にわたる、同一の日本語力客観テストと適応関連の5要因に関する同一の質問紙調査の実施により、時系列的变化に注目しながら、主に一要因分散分析と2要因分散分析の統計方法を用いて行った。

異文化社会適応はカルチャーショック (Oberg, 1954) と深く関係しており、留学生を対象に研究した適応段階におけるU型曲線仮説⁽²⁾ (Lysgaard, 1955; Morris, 1960; Sewell & Davidsen, 1961) やW型曲線仮説⁽³⁾ (Gullahorn & Gullahorn, 1963) が示すように、適応は段階的プロセスを経て達成されるもの (Oberg, 1954; Adler, 1975; 稲村, 1980) である。留学生生活の時間的経過とともに個人が総合的システムとして、一部分にでも変化を受ける

とその影響はプロセス全体に波及し (Berry et al., 1987)、異文化社会適応の過程で、多位相の適応の関連要因が相互に関与・影響しあい、異文化社会適応プロセスと状態を形成していくものと考えられる。

異文化に適応していく心理的プロセスには、言語の使用が大きな役割を果たし、異文化社会適応と言語能力とは切り離せない関係にある。なぜなら、人は言語によって情報の伝達をすると共に互いの「不確実性を減少」(Gudykunsut, 1993) させ、共通の意味構築を可能にし、不安を軽減させていくからである。

さらには、人が「異文化環境へ移行した場合、自分の周囲に援助してくれるホストの対人関係網 (ソーシャル・サポート・ネットワーク) を持つことは、異文化社会適応を果たすためにはきわめて重要なこと」(田中, 1995: 1) である。Ward et al. (1994) によれば、「異文化社会適応の構成要素である社会文化的適応の側面は、ホストとの良質な接触によって促進される」と捉えられる。ホストとの対人関係網を形成する上で、第二言語能力の果たす役割は大きく、ホストからのソーシャル・サポート (以下、「S・サポート」) は第二言語能力の個人差により認知やサポート内容に違いが現れると考えられる。

さらに異文化圏で生活する上で、異文化社会適応の中心的概念であるとして挙げられるのがソーシャル・スキル (以下、「S・スキル」) (Furnham・Bochner, 1986) である。これまでの研究では、S・スキルが欠損すると異文化に適応しにくくなるという「適応のスキル欠損仮説」(Furnham・Bochner, 1986) や、S・スキルの実施がS・サポート・ネットワークの成立を導き、速やかな社会文化的適応を可能にするという「S・スキルの異文化社会適応促進仮説」(田中, 1996) が重要とされてきた。

従来の欧米中心の異文化社会適応研究では、留学における異文化社会適応のためには英語を習得していることを当然の前提条件、あるいは国際語としての英語の使用が可能であることを暗黙の前提としていた。そのために、日本留学における日本語のようには、第二言語能力の個人差による相違をそれほど問題にされることはなく研究が進められてきた。しかし、本論においては、留学開始時の日本語力の個人差を、異文化社会適応プロセスの出発点として捉え、客観テストによる日本語力のレベル差を焦点に据えることにより、第二言語能力の相違が適応の複数の位相に関わる要因であることを検討したいと考える。その上で、言語能力の個人差を縦断的に捉えることによって、諸変数への関与と影響が時間の経過によって変化するという観点から検討を行う。また、異文化社会適応度について、来日の5か月目と8か月目に行ったアンケート調査により、日本語力と時間の経過が、異文化社会適応度にどのような関与と影響をもたらしているかを、2要因分散分析により考察を行った。

2. 先行研究

2.1 第二言語能力と異文化社会適応

一般に新環境への移行においては、S・サポートを獲得できる対人関係の形成が適応を促進すると言われ（Adelman,1988；田中,2000；八島,2004）、対人関係形成には移行先での目標言語の使用が必要となる。本論で言う目標言語とは留学先で使用される第二言語のことであり。また、本論の客観テストの「日本語力」とは、発話能力が含まれてはいないが、第二言語能力の「聴解、読解、文法」を総合的に組み込んだ日本語能力のことを言う。

八島（2004:21）は異文化間の対人相互作用を進める上で、「一般に第二言語能力が不十分な場合、その言語を使用したコミュニケーションには、少なくとも次の3点に影響が表れる」と言う。すなわち、1）共同作業としての対話のプロセス 2）話者の心理面 3）話者に対する評価である。1）では、対人関係成立にはコミュニケーション、すなわち、自分と相手が共同で行う「共通の意味の構築」が前提となる。共通の意味形式には、自己を開示し相手の「応答」を求める「相互性」が不可欠であること、2）では、第二言語使用時には心理面の不安要因が関係すること、3）では、第二言語では語彙や表現の選択の幅が制限されがちなことにより、相手に実際より能力が劣った未熟という印象をもたれることから、不自由な第二言語を使うことと周囲の評価を意識することで学習参加者の不安が引き起こされる（p.22-30）と言う。さらに、八島は、第二言語と適応の関係で、以下の二点を指摘した。すなわち、「言語能力の個人差が重要なのは言語を媒介として意思疎通を行うためであることと、これまで留学生など…(略)…の滞在参加者を対象に、実際に現地語の能力がどの程度社会文化的適応に関係するかについてはあまり調査が行われていない」（p.23）ことである。その問題意識の下に、八島は日本人高校生が米国に留学した際の目標言語となる英語を対象に、第二言語の客観評価を使ってその影響をモデルに組み込んだパス解析を行っている。

2.2 目標言語使用環境における自尊感情

元田（2005：60）によれば、「在日留学生は、日常生活において目標言語の日本語使用が必須であり、特に目標言語使用環境では、第二言語を使用する自己に向き合う時間や機会がはるかに多い」と言う。そのことが自己概念の形成や変容においても重要な意味を持つと予想される。それゆえ、目標言語使用環境では、教室内外の第二言語使用の自尊感情と不安にも着目する必要がある、と述べている。自尊感情とは、自己に対する価値感情であり、肯定的な自己概念や自己受容感であり、第二言語学習者は以下の4つの比較を通して自尊感情に脅威を受けると考えられる（元田、同上）。第一は母語での自分との比較であり、第二は、目標言語話者との比較である（Clément et al.,1980）。第三は、他の学習者との比較であり（Young,1990）、第四は、到達目標との比較である。第二言語上達への焦りや苛立ちなどの情意要因は、自己評価と自尊感情に関わっており、第二言語の使用に関

する自尊感情は一般的な自尊感情よりも日本語使用不安との関係が強い（元田，2005：112）と考えられる。

2.3 異文化社会適応とカルチャーショック

移行先の新しい環境社会でうまくやっていくためには、その地での社会的なスキルやインターアクションのしかたなどの文化学習が必要である。Ward, et al., (2001：65) は、「カルチャーショックとは移動した新しい社会の中で、これまで慣れた環境には存在しなかった文化的な要素を、新しく経験するという困難に因るものである」と述べている。Furnham & Bochner (1982) は英国に留学中のインターナショナルスチューデントに調査を実施し、日常的な経験の中で難しいと思われる項目についてその評価を調べた。その結果、文化的に近い地域から来た人は社会的な困難さをあまり経験していないこと、反対に遠い地域から来た人はより大きな困難さを経験していることが示され、社会文化的適応には個別文化への適応力が関わっていることを示唆した。また、異文化間のコミュニケーション方法の相違の中には、言葉によるコミュニケーションに依存する低コンテクスト文化と、コード化されたメッセージの中で限られた情報の提供により推測していく高コンテクスト文化を背景とするコミュニケーションの相違や、個人主義と集団主義の行動倫理と社会的価値観の相違（Ward, et al., 2001：53）などがある。これらの要素がコミュニケーションパターンを形成して異文化間の人々の出会いを難しくする要因となることを述べている。

2.4 ソーシャル・スキルと異文化社会適応

社会的なスキル（以後、S・スキルと同義として使用）について、Takai & Ota (1994) は、文化的な特徴を考慮し、その文化に特有なものと文化差に依存しない文化普遍的な点について同時に考えていく必要があることを指摘した。田中（1990）では、対人関係上のS・スキルには、A)文化一般的な要素とB)文化特定の要素が考えられると述べて、移行先の異文化圏では後者が欠損しており、それを十分に獲得していないうちは、社会的な有能性も発揮できずに困難を感じると説いた。田中（2000：24）は日本社会で学習すべきスキルの特定化を指向して、在日留学生の対人行動上の困難には何があるのかを探索した。その結果、田中（2000：146-147）は、外国人から見て特徴的な日本人の行動上のS・スキルとして、以下の6つを挙げている。すなわち、①日本的な細やかさに起因する表現の「間接性」、②文化特異性の高い儀礼的行動や社交の様式を含む社会の「通念」、③社会的場面での遠慮深さとしての「開放性」の抑制、④文化的規範に基づく「異性」との関係、⑤「集団」主義的な行動の傾向、そして⑥「外人扱い」されることへの対応、である。

2.5 ソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポート

新しい文化環境において環境と安定した相互的で機能的な関係を築いていくプロセスをKim (1988,2001) は‘adaptation’ということばを用いて表しており、その中心にホス

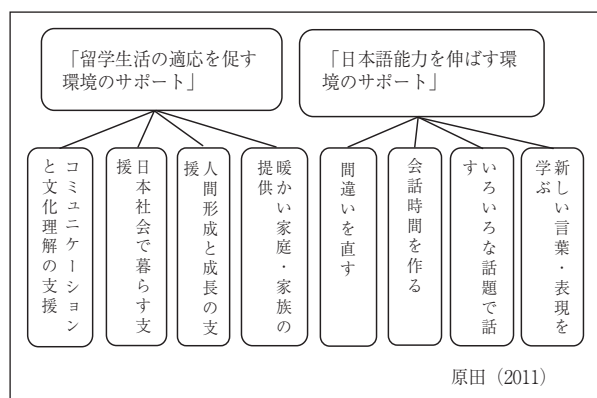


図1 ホームステイの提供するソーシャル・サポート

的、心理的援助を指し、個人の精神的安定や健全に不可欠の要素（マグワイア,1994；スコット,1989）である。S・サポートの種類には、大きく、A) 社会情緒的サポートと、B) 道具的サポートの二つがあり（浦,1992：58-59）、それぞれの内容は、A) が、ストレスに苦しむ人の自尊心や情緒に働きかけて、問題解決に当たる状態に戻す働きかけであり、B) は、ストレスに苦しむ人に、解決するのに必要な資源を提供し、情報を与える働きかけである。本論で取り上げる S・ネットワークは、留学生の A) ホームステイ（以下「HS」と略記する）と B) 友人関係であり、本論での S・サポートは、A) HS と B) 友人関係の二つから得られるものを指す。

本論における参加留学生は全員が留学先の日本で HS をしている。HS については、原田（2011）により、HS の提供するサポートの内容は、上記の図1が示すように、「留学生生活の適応を促す環境のサポート」と「日本語能力を伸ばす環境のサポート」の2種類、及びその下位項目の各4種類のサポートがある。原田（2011）では、HS での各サポートは、留学生の「日本語能力向上」と「HS の満足度」の認知に関与し、日本語能力の中でも特に「聴解能力向上」に影響していることを、日本語の客観テストを用いた結果との関連により考察している。また、原田（2012）では、目標言語である日本語力が HS でのホスト家族との生活を通じて、いかに重要なコミュニケーション上での機能を果たすかを留学生へのアンケートと面接により調査している。それと同時に、日本語力の不足が時としてホスト家族との葛藤の原因となり自尊感情を脅かすことにも言及している。

2.6 言語能力のレベル差と異文化社会適応

Hull (1978), Heikinheimo & Shute (1986), Marion (1986), Cox (1988) は、留学生の語学能力と社会適応には正の関係があると述べ、モイヤー（1987）は語学能力の高い留学生でも、アジアの留学生の場合は適応に強いストレスを感じる傾向があるとして、語学力のレベルとストレスの直接の関連はないと述べている。また、岩男・萩原（1988）は、欧米系の留学生の方がアジアの留学生より言語能力は低い、対日イメージが良いため

トとのコミュニケーションを据えている。本論で言うソーシャル・ネットワーク（以下、「S・ネットワーク」）とは、新しい文化環境でのホストからの支援の対人関係網（Whittaker & Garbarino,1983）であり、S・ネットワークからは S・サポートを得ることが期待できる。

S・サポートとは、自分の周囲にいる人たちから得られる物理的

に、言語能力と異文化社会適応の関係では負の関係が出ているとして、適応の複雑さを示している。Deutsch & Won (1963) は、言語能力のある留学生ほど米国滞在の満足度が高いことを報告しており、これは言語要因を比較的軽視する傾向にある英米の研究の中で、言語の重要さの実証を試みた研究として注目されるものである。

第二言語能力と異文化社会適応関係の調査の中で、上原 (1992) は異文化圏での対人関係はS・スキル以外に、言語能力による影響も大きいことを指摘し (p.45)、日本語能力と適応の諸領域に関して詳細な調査と分析を行っている。しかし上原は日本語能力の諸領域に与える影響を、レベル群別と時期別の二つの要因からは分析していない。そこで、本論においては、初めにレベル群別により、次に時間的経過を踏まえて時期別により、日本語力と異文化社会適応関連要因の関係を捉えることを試みる。

3. 本研究の目的

本論の研究目的は、留学の居住形態においてホームステイをした留学生の日本語力が、異文化社会適応にどのように関連し影響するかを考察することにある。目的の検討課題に入る前に、課題で使用する用語を説明し、本論で扱う適応要因の構成内容に言及しておく。

構成内容は「日本語力指標」「適応関連要因」「異文化社会適応指標」の三項目から成り、

表1 「日本語力指標」「適応関連要因」「異文化社会適応指標」の構成

日本語力指標	日本語力	客観テスト
		自己評価 (Can-do 及び表現・理解力)
適応関連要因	個人要因	(A)自尊感情
		(B)ソーシャル・スキルの実施度
		(C) HS への満足度となじみ度
	環境要因	(D) HS からのソーシャル・サポート度
		(E)友人からのソーシャル・サポート度
異文化適応指標	対人関係力	
	環境適応力	
	社会文化的適応指標 (= 日本生活諸側面の満足度)	

以上の三項目は、上の表1のように整理される。「日本語力指標」とは客観テストの測定結果と自己評価の「日本語力」を含み、「適応関連要因」とは異文化社会適応に影響すると考えられる日本語以外の要因である。「適応関連要因」は「個人要因」と「環境要因」に大別される。「適応関連要因」の中で、(A) ～ (C) の下位項目が「個人要因」に属し、(D) と (E) の下位項目が「環境要因」に属する。さらに、「異文化社会適応指標」は「異文化社会適応度」の指標であり、異文化環境下での「対人関係力」「環境適応力」「社会文化的適応指標 (= 日本生活諸側面の満足度)」の三つの構成要素から成っている。

本論の研究目的の具体的な検討課題としては、以下の三点が挙げられる。課題の第一は、来日直後のテストの日本語力の個人差を、大まかに下位・中位・上位のレベル群別に分けて考えると、目標言語使用環境での、上表1の適応関連要因の(A)～(E)の変数及び「異文化社会適応度」には、異文化社会適応過程において、日本語力レベル群別との関連によってどのような相違が出てくるのかという検討である。筆者は、これまで留学先での滞在の居住形態として、HSという居住形態は、HSの過程で、S・サポートにより、1) 留學生の日本語習得を促すこと、2) 異文化社会適応を促進すること、という二点の役割を果たすことを調査し研究してきた。本論ではさらに日本語力レベル群別の違いが、S・サポートの種類やHSへの満足度・なじみ度などにおいて、異なった影響を示すのかどうかを検討する。課題の第二は、日本語力レベル群別と、「適応関連要因」との間には、来日から5か月目までと8か月目までの二つの時期別において、どのような相違と変化が見られるのかという検討である。課題の第三は、日本語力のレベル群別による「異文化社会適応度」の相違についての検討である。本論において、「異文化社会適応度」は、異文化圏での「対人関係」、「環境適応」、「社会文化的指標」の三要素により説明されている。来日時から5か月目までと帰国前の8か月目までの二つの時期別では、日本語力のレベル群別によって、「異文化社会適応度」にはどのような相違と変化が現れるのかを検討する。

上述の研究課題を背景に、本論のリサーチクエスチョン（以下「RQ」）を以下の三つとした。

- RQ1. 来日時の「日本語力」テストの結果は、5か月目までの(A)～(E)の「適応関連要因」にどのように関係するのか。また、「日本語力」のレベル群別により、「適応関連要因」にはどのような相違が見られるか。
- RQ2. 「日本語力」のレベル群別と「適応関連要因」との関係には、二つの時期によって、どのような相違が見られるか。
- RQ3. 「日本語力」のレベル群別と「異文化社会適応度」との関係には、二つの時期によって、どのような相違が見られるか。

4. 調査の概要

4.1. 参加者と調査時期

参加者は2010年9月から2011年5月までの9か月間と、2011年9月から2012年5月までの9か月間に、関西の私大K大学に滞在した合計63⁽⁴⁾名の留學生である。参加者63名に対して、来日時の9月第1週目に「日本語力」のテスト測定を実施し、その得点により参加者を、下位20名・中位29名・上位14名⁽⁵⁾の三つのレベル別群に分けた。日本語の上達度の変化を見るために、さらに来日8か月目の4月末に同一の「日本語力」テストを実施し、「日本語力」の変化が関連変数に与える影響を調査した。

63名の留學生の年齢は19才～30才の範囲であり、性別比は男性が34名で54%、女性が29

名で46%である。また、「日本語力指標」、「適応関連要因」、「異文化社会適応度」についての同一の二度の質問紙調査の時期は、一度目が来日5か月目の1月末であり、二度目が8か月目の4月末である。以下に、参加留学生の国籍（表2）と学習歴（表3）を示す。

表2 国籍

国籍	人数	パーセント
アメリカ	39	61.9
フランス	8	12.7
イギリス	6	9.5
カナダ	5	7.9
ドイツ	4	6.3
ラトビア	1	1.6
合計	63	100.0

表3 学習歴

学習期間	人数	パーセント
1年以上～2年未満	22	34.9
2年以上～3年未満	22	34.9
1年以内	12	19.0
3年以上～4年未満	6	9.5
6年以上～7年未満	1	1.6
合計	63	100.0

4.2 「日本語力指標」、「適応関連要因」及び「異文化社会適応度」に関する項目についての質問紙の構成と回答方法

以下の（1）～（3）は「日本語力指標」、（4）は「適応関連要因」、（5）は「異文化社会適応度」の項目についての調査内容と方法である。

（1）日本語学習歴：来日以前の日本語学習期間について、1年未満から8年未満までの間を7段階に分けいずれに該当するかを選択する。

（2）来日時の日本語力（客観テスト）：文法（40問35点）、聴解（10問20点）、読解（8問15点）の合計70点。設問は日本語能力試験の3・4級の過去問題から抜粋されたものに、いくつかの設問が補充されている。

（3）日本語力（自己評価）：①「現在の日本語表現力／日本語理解力において、該当するものはどれか」という英語による2項目の質問。それぞれの質問について各5選択肢の中から一つを選択する。②「日本語能力の自己評価（Can-do）尺度」（元田，2005）を用い、聴解力8項目と発話力12項目の計20項目について日本語と英語（以下、日英語）で質問し、「とても難しい」～「とても易しい」の7件法で回答する。

（4）「適応関連要因」について：自己評価回答形式

（A）〔自尊感情〕：「日本語での自尊感情（教室内・教室外）尺度」（元田，2005）を用い、教室内と教室外の自尊感情について各10項目ずつ計20項目を、日英語により質問し、「全くあてはまらない」～「非常によくあてはまる」を4件法で回答する。

（B）〔S・スキルの実施度〕：留学生はHSで文化一般のS・スキルを実施しているかどうか^⑥、そして留学生活の中で、文化特定のS・スキルを実施しているかどうかについて、文化一般については八島（2004）を参考に6項目を「全くあてはまらない」～「非常によくあてはまる」の5件法で、文化特定については田中（2000）の外国人から見て特徴的な日本人の行動と日本人とコミュニケーションすると

きの工夫（田中，同上：213）を用いて、英語により6設問で19項目を「かなりよくない」～「かなりよい」の4件法で回答する。

(C) [HS への満足度となじみ度]: ①「HS に対する満足度の認知」について原田 (2011) を用い、英語により、1項目を「全く不満だ」～「非常に満足だ」の5件法で回答する。② HS でどれぐらいホストファミリー（以下、ホスト家族）になじんでいるかについて、八島 (2004) を参考に、英語による5項目を、「全然なじんでいない」～「すっかり家族の一員だ」の5件法で回答する。

(D) [HS からの S・サポート度]: ① HS で「留学生活の適応を促す環境」及び「日本語能力を伸ばす環境」の S・サポートを得ているかどうかについて、原田 (2011) を用い、英語で、各4項目ずつの2設問を「全く同意しない」～「強く同意」の5件法で、回答する。② HS からの情緒的及び道具的な S・サポートを得ているかどうかについて、“The Index of Sojourner Social Support” (Ward et al. 2001) を用い、英語により18項目を、「誰もサポートしてくれない」～「たくさんの人がサポートしてくれる」の5件法で回答する。

(E) [友人からの S・サポート度]: 友人からの情緒的及び道具的な S・サポートを得ているかどうかについて、Ward et al. (2001) を用い、英語により、18項目を、「誰もサポートしてくれない」～「たくさんの人がサポートしてくれる」の5件法で回答する。

(5) 「異文化社会適応度」について：自己評価回答形式

〔異文化社会適応度〕: ① 対人関係と異文化環境に適応しているかどうかについて、Wilson, J. & Ward, C (2010) の Revision and Expansion of the Sociocultural Adaptation Scale (SCAS R) を用いて、英語により21項目について、「全く適応しない」～「非常に適応している」の5件法で回答する。② 社会文化的適応指標について、八島 (2004) を参考に19項目について、英語により、「全く不満だ」～「非常に満足だ」の5件法で回答する。

5. 結果と考察

5.1 来日時の日本語力による「適応関連要因」の相違 (RQ1)

RQ1. 来日時の「日本語力」テストの結果は、5か月目までの (A) ～ (E) の「適応関連要因」にどのように関係するのか。また、「日本語力」のレベル群別により、「適応関連要因」にはどのような相違が見られるか。

上述の4.2節で示した (A) ～ (E) の適応関連要因について、各評価ごとの値で得点化し、SPSS 19により統計記述量を算出した。その結果、各要因とその下位項目について表4のように示された。また、 α 係数を用いて信頼性を検討した結果、表4の最右の欄に示され

るような値となった。

表4 「客観テスト：来日時の日本語力」と「適応関連要因」の記述統計量と相関（ $n=63$ ）

				平均値	標準偏差	最小値	最大値	相関係数	α 係数 (Cronbach)
								来日時の測定テスト「日本語力」	
日本語力指標	来日時の日本語力	日本語学習歴客観テスト	日本語学習歴	2.41	1.01	1.00	6.00	.42**	.42***
			来日時のテスト「日本語力」	47.56	13.45	1.00	6.00	1	
	5 か月目の自己評価の日本語力	自己評価	日本語表現力	3.48	0.86	1.00	5.00	.47**	.84
			日本語理解力	3.56	0.86	1.00	5.00	.40**	
			Can-do 発話力	4.98	0.90	1.92	6.58	.36**	
			Can-do 聴解力	3.86	0.99	1.63	5.63	.39**	
			「自己評価」の合計					.50**	
適応関連要因	個人要因	(A) 自尊感情	教室内の自尊感情	2.69	0.47	2.00	3.80	.42**	.94
			教室外の自尊感情	2.65	0.56	1.70	4.00	.48**	
			(A)「自尊感情」の合計					.49**	
		(B) ソーシャル・スキルの実施度	HS での一般的 S・スキル	3.90	0.58	2.67	5.00	-.75**	.61
			スキル一「間接性」	3.18	0.44	2.00	4.00	.56**	
			スキル二「通念」	2.76	0.46	1.60	4.00	.53**	
			スキル三「開放性」	3.21	0.72	1.00	4.00	.61**	
			スキル四「異性」	2.95	0.66	1.33	4.00	.08	
			スキル五「集団」	3.02	0.53	1.50	4.00	-.48**	
			スキル六「外人扱い」	3.17	0.63	2.00	4.00	.78**	
			(B)「ソーシャル・スキルの実施度」の合計					.59**	
		(C) HS への満足度となじみ度	HS に対する満足度	4.43	0.78	2.00	5.00	-.37**	.80
			ホスト家族へのなじみ度	3.70	1.10	1.00	5.00	-.56**	
			(C)「HS への満足度となじみ度」の合計					-.52**	
	環境要因	(D) HS からの S・サポート度	留学生生活の適応を促す環境のサポート	4.15	0.69	1.75	5.00	-.48**	.87
			日本語能力を伸ばす環境のサポート	4.07	0.67	2.50	5.00	-.47**	
			HS からの情緒的 S・サポート	3.88	0.78	2.00	5.00	-.37**	
			HS からの道具的 S・サポート	4.18	0.69	2.11	5.00	-.55**	
			(D)「HS からの S・サポート度」の合計					-.54**	
		(E) 友人からの S・サポート度	友人からの情緒的 S・サポート	3.47	0.78	1.44	5.00	-.37**	.81
			友人からの道具的 S・サポート	3.83	0.71	1.89	5.00	-.17	
			(E)「友人からの S・サポート度」の合計					-.30**	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

次に、日本語力と適応関連要因の関係を見るために、来日時の客観テスト「日本語力」の得点を基にして (A) ～ (E) の適応要因との相関をピアソンの積率相関係数によって求めた。その結果、表4に示されるように、S・スキル四「異性」⁽⁷⁾と友人からの道具的S・サポートを除き、各要因はすべての変数において「日本語力」と有意な相関が認められた。さらに、来日時の「日本語力」と、「個人要因」である「(A) 自尊感情」と「(B) S・スキルの実施度」の2変数との間には正の相関があるのに対して、同じく「個人要因」である「(C) HSへの満足度となじみ度」との間には負の相関が認められた。また、「環境要因」である「(D) HSからのS・サポート度」と「(E) 友人からのS・サポート度」の2変数との間にはいずれも負の相関があるのが認められた。これはテスト「日本語力」の成績の上位の参加留学生ほど「個人要因」の「自尊感情」と「S・スキルの実施度」が高く、その一方で、「日本語力」の成績の下位の参加者ほど「個人要因」の「(C) HSへの満足度となじみ度」及び「環境要因」のHSと友人からのS・サポート度が高いことを示し、S・サポート度への依存度が高いことが示唆されている。次に、以上の来日時の「日本語力」と「環境要因」の相関について、さらに、日本語力の個人差レベルによる適応関連要因への影響を見るために、来日時の「日本語力」の得点結果に基づき、参加者を下位、中位、上位の3つのレベル群に分けた。そのレベル群を要因として、一要因分散分析を行い、適応関連要因との結果を以下の表5に示した。

表5 来日時のテスト「日本語力」のレベル群別による1要因分散分析結果 (n=63)

			下位のレベル群 (n=20)		中位のレベル群 (n=29)		上位のレベル群 (n=14)					
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	F 値	多重比較		
日本語力指標	来日から5か月目の日本語力	客観テスト	日本語学習歴	1.90	0.79	2.45	0.95	3.07	1.07	6.57**	下<中、中<上	
			来日時のテスト「日本語力」	31.30	9.04	51.41	4.41	62.79	3.41	119.65***	下<中<上	
		5か月目の日本語力（自己評価）	日本語表現力	3.05	0.89	3.45	0.74	4.14	0.67	8.27***	下・中<上	
			日本語理解力	3.10	0.91	3.62	0.78	4.07	0.62	6.39**	下<中、中<上	
			Can-do 発話力	2.45	0.20	2.74	0.50	2.95	0.54	3.76*	下・中<上	
適応関連要因	個人要因	(A)自尊感情	教室内の自尊感情	2.45	0.83	2.74	0.50	2.95	0.54	5.56**	下<中、中<上	
			教室外の自尊感情	2.28	0.28	2.74	0.55	2.97	0.63	8.80***	下<中・上	
		(B)S・スキルの実施度	HS での一般的 S・スキル	4.53	0.29	3.76	0.40	3.27	0.26	59.26***	下>中>上	
			S・スキル一「間接性」	3.00	1.11	3.19	0.40	3.61	0.32	16.52***	下<中<上	
			S・スキル二「通念」	2.46	0.37	2.79	0.44	3.13	0.37	11.38***	下<中<上	
			S・スキル三「開放性」	2.75	0.70	3.21	0.66	3.86	0.23	13.63***	下・中<上	
			S・スキル四「異性」	2.97	0.77	2.89	0.51	3.05	0.79	0.29	---	
			S・スキル五「集団」	3.45	0.39	2.93	0.42	2.57	0.47	18.84***	下>中>上	
			S・スキル六「外人扱い」	2.41	0.25	3.42	0.42	3.75	0.22	81.07***	下<中<上	
		(C)H S への満足度となじみ度	HS への満足度	4.90	0.31	4.24	0.95	4.14	0.53	6.43**	下>中・上	
			ホスト家族へのなじみ度	4.70	0.47	3.34	1.11	3.00	0.68	20.46***	下>中・上	
		環境要因	(D)H S からのS・サポート度	留学生生活の適応を促す環境のサポート	4.60	0.37	4.16	0.68	3.50	0.57	15.27***	下>中・上
				日本語能力を伸ばす環境のサポート	4.50	0.41	3.92	0.66	3.75	0.73	7.77***	下>中>上
				HS からの情緒的 S・サポート	4.24	0.66	3.91	0.84	3.32	0.46	6.91**	下>中・上
				HS からの道具的 S・サポート	4.62	0.39	4.24	0.64	3.40	0.45	21.77***	下・中>上
			(E)友人からのS・サポート度	友人からの情緒的 S・サポート	3.90	0.77	3.43	0.63	2.91	0.74	8.28***	下>中、中>上
				友人からの道具的 S・サポート	4.07	0.69	3.71	0.71	3.74	0.71	1.71	---

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$; 自由度はいずれも (2,61)

表5において、一要因分散分析の結果、 F 値が示すように、(B)と(E)の変数の下位項目であるS・スキル四「異性」と友人からの「道具的S・サポート」を除いた全ての尺度において有意差が認められた。結果、日本語力レベル群別がそれぞれの要因に影響を与えていることが示唆された。

さらに、Tukey-Kramer法による多重比較(5%水準)を行った結果、表5の多重比較の欄にあるように、有意差のある尺度の中では、「友人からの情緒的S・サポート」の平均値が、「下>中、中<上」と、中位群が下位群と上位群より低いという不規則な差の型を示した。しかし、それ以外では、「適応関連要因」の下位項目が示す水準間の差の関係は、基本的に次のA型とB型の二種類に分かれた。すなわち、A型は日本語レベル群の上位から下位の方に正の方向にある型(①下<中<上、②下<中、中<上、③下<中・上、④下・中<上)であり、B型は日本語レベル群の上位から下位の方に負の方向にある型(①下>中>上、②下>中・上、③下・中>上)の二種である。

以上の結果から、A型はレベル群上位にある参加者ほど日本語力指標が高いと同時に、「個人要因」の自尊感情とS・スキルの実施度が高いこと、一方では、HSへの満足度となじみ度が低く、HSや友人からのS・サポートを必要とせず、異文化社会の環境においても自立的にやっていけるレベル群であることが示唆された。また、B型では、レベル群下位にある参加者ほど、日本語力指標が低いと同時に、「個人要因」の自尊感情とS・スキルの実施度が低いこと、一方では、HSへの満足度となじみ度が高く、HSや友人からのS・サポートを必要とし、他者に頼る傾向があるレベル群であることが示唆された。

上述の分析結果から考察すると、本論においては、来日5か月目までは、来日時の日本語力が不十分なほど、先行研究での元田(2005)が示すように、留学生は教室内外での自尊感情に脅威を受け、八島(2003)が指摘するように、対人相互作用を進める上でその言語を使用したコミュニケーションに影響が出て、田中(1990)が主張するとおり、対人関係上のS・スキルの獲得ができないままに社会的な有能性を発揮することに困難を感じる状況にあるという結果となった。また、日本語力が下位にある参加者ほど、HSや友人からのS・サポートに頼るという存在であることが分析結果から得られた。来日時から5か月目までの時期は、日本という異文化社会での自立は日本語の習得と上達に関わっており、重要な鍵となるとの示唆であった。したがって、5か月目までの時期は、日本語習得に全力を注ぎ、習得のためにあらゆる機会を利用することが肝要となると考えられる。

5.2 日本語力レベル群別に見る二つの時期の「適応関連要因」の相違 (RQ2)

RQ2. 「日本語力」のレベル群別と「適応関連要因」との関係には、二つの時期によって、どのような相違が見られるか。

日本語力レベル群別(以下、「レベル群別」と、5か月目と8か月目の二つの調査時期

別（以下、文中では「時期別」、表では「前 - 後」と記す）による、A. 留学生間要因と B. 留学生内要因、そして A × B の交互作用の効果を見るために、2 要因の混合計画の分散分析により、反復測定を行った。その結果、各下位項目は表 6 に示される値となった。なお、分析に当たっては、SPSS20 の Advanced Models を用いた。

表 6 日本語力レベル群別と二つの時期（前 - 後）による 2 要因分散分析結果（ $n=63$ ）

				下位のレベル群 (n=20)				中位のレベル群 (n=29)				上位のレベル群 (n=14)				F 値		
				5 か月目		8 か月目		5 か月目		8 か月目		5 か月目		8 か月目				
				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	レベル群
日本語力指標	客観テスト	日本語学習歴	1.90	0.79	1.90	0.79	2.45	0.95	2.45	0.95	3.07	1.07	3.07	1.07				
		日本語力テスト	31.30	9.04	54.03	9.45	51.41	4.41	62.47	4.27	62.79	3.41	64.01	4.49	75.00***	160.18***	40.07***	
	日本語力 (自己評価)	日本語表現力	3.05	0.89	3.25	0.72	3.45	0.74	3.59	0.63	4.14	0.67	4.00	0.39	8.70***	15.22***	4.73*	
		日本語理解力	3.10	0.91	3.80	0.41	3.62	0.78	3.92	0.41	4.07	0.62	4.14	0.36	7.22***	9.72**	3.73*	
		Can-do 発話力	2.45	0.20	4.95	0.98	2.74	0.50	4.98	0.90	2.95	0.54	5.69	0.73	3.89*	6.10*	1.13ns	
		Can-do 聴解力	3.54	0.90	3.81	0.94	3.74	0.99	3.97	0.98	4.54	0.84	4.59	0.82	4.70*	4.15*	0.51ns	
適応関連要因	個人要因	(A)自尊感情	教室内の自尊感情	2.45	0.83	2.57	0.30	2.74	0.50	2.70	0.50	2.95	0.54	2.89	0.48	3.98*	0.014ns	2.41ns
			教室外の自尊感情	2.28	0.28	2.38	0.28	2.74	0.55	2.77	0.58	2.97	0.63	2.99	0.63	13.05***	0.25ns	0.08ns
		(B)S・スキルの実施度	HSでの一般的S・スキル	4.53	0.29	4.39	0.49	3.76	0.40	4.07	0.51	3.27	0.26	4.10	0.62	21.86***	23.19***	13.69***
			S・スキル一「間接性」	3.00	1.11	3.08	0.42	3.19	0.40	3.24	0.40	3.61	0.32	3.67	0.27	15.22***	7.65**	1.74ns
			S・スキル二「通念」	2.46	0.37	2.75	0.58	2.79	0.44	2.84	0.42	3.13	0.37	2.97	0.44	5.00**	0.39ns	7.23**
			S・スキル三「開放性」	2.75	0.70	2.73	0.70	3.21	0.66	3.12	0.69	3.86	0.23	3.29	0.61	8.63***	9.85**	4.75*
			S・スキル四「異性」	2.97	0.77	2.93	0.65	2.89	0.51	2.93	0.55	3.05	0.79	2.83	0.90	0.03ns	2.49ns	3.06†
			S・スキル五「集団」	3.45	0.39	3.23	0.50	2.93	0.42	2.67	0.70	2.57	0.47	2.96	0.84	7.98***	0.21ns	8.80***
			S・スキル六「外人扱い」	2.41	0.25	2.69	0.57	3.42	0.42	3.26	0.59	3.75	0.22	3.41	0.53	31.08***	1.87ns	10.21***
		(C)HSへの満足度となじみ度	HSへの満足度	4.90	0.31	4.10	0.91	4.24	0.95	4.28	0.88	4.14	0.53	4.36	1.15	0.92ns	1.81ns	5.20**
			ホスト家族へのなじみ度	4.70	0.47	3.75	0.79	3.34	1.11	3.83	1.04	3.00	0.68	3.64	1.08	6.09**	0.24ns	18.42***
	環境要因	(D)HSからのS・サポート度	留学生生活の適応を促す環境のサポート	4.60	0.37	4.33	0.69	4.16	0.68	4.21	0.73	3.50	0.57	3.97	0.78	4.28*	3.24†	10.45***
			日本語能力を伸ばす環境のサポート	4.50	0.41	4.11	0.81	3.92	0.66	3.84	0.87	3.75	0.73	3.71	1.00	3.66*	3.13†	1.41ns
			HSからの情緒的S・サポート	4.24	0.66	4.23	0.68	3.91	0.84	3.93	0.81	3.32	0.46	3.79	0.77	3.88*	7.74**	6.00**
			HSからの道具的S・サポート	4.62	0.39	4.59	0.41	4.24	0.64	4.20	0.67	3.40	0.45	3.97	0.78	11.02***	15.46***	19.52***
		(E)友人からのS・サポート度	友人からの情緒的S・サポート	3.90	0.77	4.04	0.78	3.43	0.63	3.42	0.70	2.91	0.74	3.10	0.93	7.87***	4.43*	1.76ns
			友人からの道具的S・サポート	4.07	0.69	3.61	0.69	3.71	0.71	3.05	0.62	3.74	0.71	2.75	0.81	4.69*	79.61***	3.21*

† $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$, ns 有意差なし；主効果と交互作用における数値は F 値 ($df = 2, 60$)

分析の結果、22変数の中の以下の15変数において、有意な交互作用が認められ、時期別により、レベル群別の効果が異なることが示された。15変数とは、「日本語力」の中の、1.「日本語力テスト」、自己評価の2.「日本語表現力」、3.「日本語理解力」、「個人要因」の中の、4.「HS での一般的 S・スキル」、S・スキルの実施度の5.S・スキル二「通念」、6.三「開放性」、7.四「異性」、8.五「集団」⁽⁸⁾、9.六「外人扱い」、そして、10.「HS への満足度」と11.「ホスト家族へのなじみ度」、「環境要因」の中の、12.「留學生活の適応を促す環境のサポート」、13.「HS からの情緒的 S・サポート」、14.「HS からの道具的 S・サポート」、15.「友人からの道具的 S・サポート」である。以下、有意な交互作用があった15変数について、五つに分けて分析の結果と考察を記す。

第一に、「日本語力テスト」及び自己評価による「日本語表現力」「日本語理解力」の交互作用の結果から、5か月目から8か月目へと、下<中<上のレベル群別順位で、平均値が高くなっていることがわかった。客観テストと自己評価「日本語理解力」においては、8か月目には5か月目より日本語力が向上したことが認められた。

第二に、HS での「一般的 S・スキル」(会話の機会を持つように努めた、家事を手伝った、家族の生活スタイルに合わせる努力をした、などの言語の使用が不要なスキル)については、5か月目までは下>中>上の順位で下位レベル群ほど「一般的 S・スキル」の実施度が高かった。しかし、8か月目では下位レベル群の実施度は4.53→4.39と低くなり、その一方で、中位と上位レベル群はそれぞれが3.76→4.07、3.27→4.10へと「一般的 S・スキル」実施の平均値が高くなった。特に上位レベル群の HS への評価の上昇が目立った。以上のように、8か月目では、5か月目までの時点で大きかった下位と上位の「一般的 S・スキル」の実施度の平均値の差が縮小した。これは、留學生活の時間の経過と共に、下位レベル群の HS からの S・サポート度に対する依存度が低くなった結果と解釈される。すなわち、下位レベル群では、8か月目には、日本語力が向上すると同時に HS 以外での活動範囲が広まり、HS での「一般的 S・スキル」の必要性が減じたのではないかと推察される。同時に、中位と上位レベル群では、HS 生活への見直しがあり、HS 生活を充実させようという意識の変化が生じ、「一般的 S・スキル」の実施度が高くなったことが背景にあると推察される。

第三に、S・スキルの「通念」⁽⁹⁾「開放性」⁽¹⁰⁾「集団」⁽¹¹⁾「外人扱い」において、時期別に、レベル群別の主効果が見られた。「集団」を除いた「通念」「開放性」「外人扱い」の三つの S・スキルでは、日本語力レベル群別に、下<中<上の順位で、時間の経過に伴って、8か月目には S・スキルの実施度が高くなった。日本語力が向上するにつれて、8か月目には S・スキルの実施度の自己評価も上昇したと考えられる。S・スキルの「集団」については、5か月目では下>中>上の順位で、日本語力の低い者ほど「集団」の S・スキルを実施するという傾向が見られた。しかし、8か月目では、下位と中位のレベル群では「集団」の S・スキルの実施度が低くなった。その一方で、上位レベル群では5か月目よりは8か月目で、「集団」の実施度の平均値は高まった。「異性」については、有意な主

効果は見られなかった。

第四に、「HS への満足度」については、下位のレベル群の平均値が、8 か月目には、4.90→4.10へとかなりの程度で低くなった。それに対して中位と上位のレベル群では、8 か月目にはそれぞれの平均値が4.24→4.28、4.14→4.36、とやや高くなった。この背景には、日本語力の向上と HS への依存の必要性の変化があると見られる。下位のレベル群では5 か月目より8 か月目で HS への依存度が低下したと考えられる。一方、中位と上位のレベル群では、日本社会での生活時間を経ると共に、HS から得られることが多いとの見直しがあり、HS に対する評価が高まったことが理由の一つにあると解釈される。

第五に、HS からの S・サポート度においては、「留学生活の適応を促す環境のサポート」

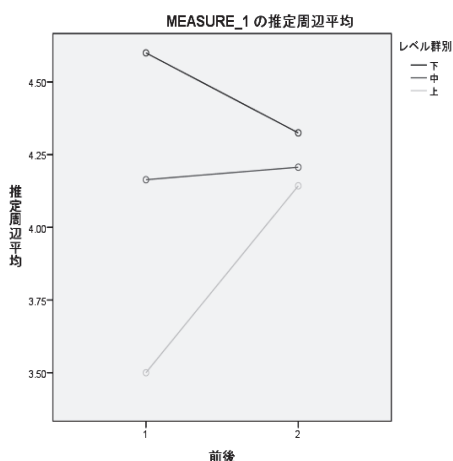


図2 レベル群別による「留学生活の適応を促す環境のサポート」の平均点の変化

「日本語能力を伸ばす環境のサポート」及び「HS からの情緒的 S・サポート」「HS からの道具的 S・サポート」で、それぞれ有意なレベル群別と時期別の主効果が見られた。「留学生活の適応を促す環境のサポート」においては、下位のレベル群では4.60→4.33へと評価が低くなったのに対して、中・上位のレベル群では、それぞれが5 か月目から8 か月目では平均値が4.16→4.21、3.50→3.97へと、高くなっていることがわかった (図2)。下位のレベル群の日本語力が向上すると共に、5 か月目までと比較して、HS からの S・サポート度に対する評価が低くなったためと解釈される。

その一方で、中・上位のレベル群の日本社会での生活経験が深まると共に、HS からの S・サポート度に対する評価が高くなったことが背景にあると考えられる。

また、「日本語能力を伸ばす環境のサポート」では、下位のレベル群では4.50→4.11へと平均値が低下した。同時に、中・上位のレベル群においてもそれぞれが3.92→3.84、3.75→3.71へと平均値をわずかに下げた。いずれのレベル群においても、8 か月目では、「日本語能力を伸ばす環境のサポート」としての HS への評価が下がった。滞日生活の時間の経過と共に、HS の外での行動範囲が広がり、ホスト家族以外の日本人との交流を通じて、他に日本語能力を伸ばす環境が得られたことが変化の背景にあると考えられる。

以上のように、前述の表6の「日本語力指標」と「適応関連要因」の「個人要因」と「環境要因」において、S・スキルの「異性」、「HS への満足度」を除く全ての下位項目で、有意なレベル群別の主効果が認められた。日本語力のレベル差によって、適応要因に影響を与えることが示された。また、「日本語力指標」の全項目と、「環境要因」の S・スキル「間接性」及び「開放性」、そして「HS からの S・サポート度」と「友人からの S・サポート度」の全ての下位項目において、有意な時期別の主効果が認められた。すなわち5 か

月目と8か月目では時期別の主効果が異なることがわかった。留学生内の要因において、時間の経過が適応要因に評価の変化をもたらしたことが示された。

「教室内外の自尊感情」においては、有意なレベル群別の主効果が見られた。評価の得点は二つの各時期で、下<中<上のレベル群別の順位であった。教室の内と外で、日本語力の上位の者ほど自尊感情が高く、下位の者ほど自尊感情が低いということに、時期別の変化はなかった。日本語力の下位の者は、留學生活の時間的経過の中で、5か月目までより8か月目へと、自尊感情が幾分高くなった。しかしレベル群別から見ると、下<中<上の順位に変化はなかった。

上記のRQ2の分析結果から、5か月目までと8か月目まででは、「日本語力」のレベル群別によって、「適応関連要因」との関係には、相違と変化が見られることがわかった。

分析の結果から、二つの時期に見られた相違には、以下の四つの理由があると考察される。第一には、「日本語力」の向上による変化である。「日本語力」が向上した結果、下位のレベル群では、S・サポートに対する依存度が低まり、HSに対する評価が下がったと解釈される。第二には、S・スキルの実施度の向上である。時期別に、下<中<上のレベル群別順位で、S・スキルの実施度が向上していることから、日本語力の向上がS・スキルの実施度の向上に関係していると考えられる。第三には、日本社会での生活経験が深まる中で、HSのS・サポートに対する評価の見直しが行われていることが考えられる。下位レベル群では、異文化社会での自立的な行動が可能になると共に、HSからのS・サポートへの依存度が低下したことが考えられる。中・上位のレベル群においては、異文化社会の「環境要因」を再評価するという傾向が見られた。日本社会で安定した留學生活が得られ、それが「HSへの満足度となじみ度」及び「環境要因」に対する評価に反映したと考えられる。第四には、全てのレベル群において、異文化社会への適応が進んだことが挙げられる。日本語力とS・スキルの実施度の向上に伴ない、日本の社会文化の中で、日本人ホストとの対人相互作用の効果が高まった結果だと考えられる。レベル群別に見る二つの時期の「異文化社会適応度」の相違については、次節のRQ3でさらに検討を行う。

5.3 日本語力レベル群別に見る二つの時期の「異文化社会適応度」の相違 (RQ.3)

RQ3. 「日本語力」のレベル群別と「異文化社会適応度」との関係には、二つの時期によって、どのような相違が見られるか。

以下の表7に、「異文化社会適応度」指標の「対人関係力」について、日本語力のレベル群別に、設問ごとの平均値と標準偏差を示す。数値は5か月目と8か月目の二つの時期別に示されている。この調査は、参加留学生の日本社会での対人関係形成の能力に関するものである。

(調査では、Wilson, J. & Ward, C (2010) の Revision and Expansion of the Sociocultural Adaptation の Scale (SCAS R) を、英語の原文のままで使用した。本論では筆者が日本語に翻訳したものを使用している。)

表7 異文化社会での対人関係形成能力に関する設問項目と調査結果

調査時期			5 か月目		8 か月目	
項目	日本語力の レベル群別	各レベル群 の度数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 人間関係の構築と維持ができる	下	20	3.00	0.79	3.60	0.88
	中	29	3.62	1.01	3.76	0.79
	上	14	4.21	0.70	4.21	0.70
	合計	63	3.56	0.98	3.81	0.82
2. 社会的な行事での日本人との交流ができる	下	20	3.10	0.72	3.55	0.83
	中	29	3.34	0.81	3.41	0.91
	上	14	4.00	0.88	4.00	0.88
	合計	63	3.41	0.85	3.59	0.89
3. 日本人のゼスチャーや顔の表情への的確な解釈と反応ができる	下	20	2.75	0.72	3.55	1.05
	中	29	3.38	0.82	3.38	0.94
	上	14	4.21	0.80	4.29	0.61
	合計	63	3.37	0.94	3.63	0.97
4. 他の学生や仲間との効果的な作業ができる	下	20	3.25	0.64	3.80	0.95
	中	29	3.97	0.63	3.97	0.63
	上	14	4.21	0.58	4.21	0.70
	合計	63	3.79	0.72	3.97	0.76
5. 自分以外の他の人々の感情の正確な解釈ができる	下	20	3.15	0.59	3.65	0.88
	中	29	3.34	1.08	3.55	1.09
	上	14	4.21	0.80	4.43	0.76
	合計	63	3.48	0.96	3.78	1.01
6. ホストの言語を理解したり話したりすることができる	下	20	2.60	0.94	2.95	1.15
	中	29	3.45	0.87	3.41	0.82
	上	14	4.43	0.51	4.36	0.63
	合計	63	3.40	1.06	3.48	1.03
7. 文化的に適切な方法で話し方のスピードを変えることができる	下	20	2.65	0.93	3.00	1.21
	中	29	3.17	0.89	3.24	0.83
	上	14	4.00	0.55	4.36	0.50
	合計	63	3.19	0.96	3.41	1.04
8. 自分の行為を改善するために他の学生からフィードバックが得られる	下	20	2.85	0.75	3.45	1.10
	中	29	3.34	0.77	3.17	0.80
	上	14	3.79	0.89	3.93	0.62
	合計	63	3.29	0.85	3.43	0.91
9. 異性とのつきあいがうまくできる	下	20	4.30	0.66	4.10	0.64
	中	29	3.66	0.81	3.55	0.78
	上	14	3.86	0.77	4.14	0.53
	合計	63	3.90	0.80	3.86	0.74
10. 文化的に的確な方法で日本人ホストに自分の考えが伝えられる	下	20	2.90	0.64	3.65	0.93
	中	29	3.66	0.72	3.55	0.74
	上	14	4.29	0.73	4.29	0.61
	合計	63	3.56	0.86	3.75	0.82
11. 上の地位の人々や官僚との取引や対応ができる	下	20	2.90	0.64	3.30	0.80
	中	29	3.38	0.62	3.07	0.84
	上	14	3.36	0.50	3.93	0.47
	合計	63	3.22	0.63	3.33	0.82
12. ホスト言語を読んだり書いたりする能力がある	下	20	2.35	0.59	2.70	1.03
	中	29	3.62	0.73	3.45	0.74
	上	14	4.36	0.50	4.14	0.77
	合計	63	3.38	0.99	3.37	0.99

5か月目の調査結果では、「9. 異性とのつきあいがうまくできる」と、「11. 上の地位の人々や官僚との取引や対応ができる」を除いて、全ての項目の平均値が、下<中<上のようにレベル群別の昇順となっている。すなわち、日本社会文化への適応においては、日本語力の上位の留学生ほど対人関係形成の能力があるという結果になった。しかし、8か月目では、全設問のうちの5項目で下位と中位の平均値の順位が入れ替わり、下位の方が高い数値を示す結果となった。一方で、「対人関係力」の全ての項目において、上位の者の平均値は二つの時期で最高値を示し、共に上位であることに変化はなかった。

次に、表8に、異文化社会での「環境適応力」について、日本語力のレベル群別に、調査の各設問と平均値及び標準偏差を示す。

表8 異文化社会での環境適応力に関する設問項目と調査結果

調査時期			5か月目		8か月目	
項目	日本語力のレベル群別	各レベル群の度数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 勉強や仕事に責任を持ち管理ができる	下	20	3.20	0.41	3.65	0.75
	中	29	3.90	0.72	3.79	0.77
	上	14	4.50	0.52	4.14	0.66
	合計	63	3.81	0.76	3.83	0.75
2. 趣味や関心ごとの維持ができる	下	20	3.40	0.75	3.85	0.88
	中	29	3.72	0.70	3.86	0.74
	上	14	4.64	0.50	4.29	0.61
	合計	63	3.83	0.81	3.95	0.77
3. 周囲の騒音に適応できる	下	20	3.55	0.69	4.10	0.91
	中	29	3.97	0.57	3.90	0.82
	上	14	4.57	0.51	4.36	1.15
	合計	63	3.97	0.69	4.06	0.93
4. 自分が求めているコミュニティのサービスが獲得できる	下	20	2.90	0.79	3.35	1.04
	中	29	3.69	0.89	3.69	1.00
	上	14	3.93	0.73	3.86	1.03
	合計	63	3.49	0.91	3.62	1.02
5. 人口過密への適応ができる	下	20	3.10	1.07	3.50	1.24
	中	29	3.38	0.90	3.55	0.95
	上	14	4.21	0.58	4.36	0.74
	合計	63	3.48	0.98	3.71	1.05
6. コミュニティの活動に出席したり参加したりできる	下	20	3.00	0.65	3.35	0.99
	中	29	3.28	0.88	3.28	0.84
	上	14	3.50	0.52	3.43	1.02
	合計	63	3.24	0.76	3.33	0.92
7. 自分の行きたいところを見つけて行くことができる	下	20	3.00	0.92	3.50	1.19
	中	29	3.41	0.68	3.59	0.73
	上	14	4.57	0.51	4.14	1.17
	合計	63	3.54	0.93	3.68	1.01
8. 生活の速度の違いに適応できる	下	20	3.05	0.89	3.70	1.17
	中	29	3.66	0.77	3.62	0.86
	上	14	4.36	0.63	4.29	0.73
	合計	63	3.62	0.91	3.79	0.97
9. 日本の社会的規範、規則、態度、ビリーフ、習慣に合うように自分の行動が変えられる	下	20	3.10	0.85	3.80	1.06
	中	29	3.48	0.95	3.52	1.09
	上	14	4.21	0.58	4.14	1.10
	合計	63	3.52	0.93	3.75	1.09

表8は、留学という環境の変化の中で、各設問に対する環境適応力がどの程度維持されているかを調査したものである。5か月目では、全ての項目の平均値が下<中<上のレベル群別の降順となっている。すなわち、5か月目では、日本語力の上位の者ほど環境適応力があることを示している。しかし、8か月目では、9設問の内の4項目で下位と中位の順位が入れ替わり、下位の方が中位より高い数値を示している。一方で、上位は全ての項目で上位のままであり、8か月目においても上位であることに変化はない。すなわち、上位と下位・中位との間には判然とした差が保たれている。

表9 社会文化的適応指標に関する設問項目と調査結果

調査時期			5か月目		8か月目	
項目	日本語力のレベル群別	各レベル群の度数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 大学の環境	下	20	4.60	0.50	4.40	0.68
	中	29	4.34	0.61	4.14	0.79
	上	14	3.93	0.92	4.07	0.73
	合計	63	4.33	0.70	4.21	0.74
2. 大学のスタッフの世話のしかた	下	20	4.60	0.50	4.65	0.49
	中	29	4.55	0.69	4.45	0.63
	上	14	3.86	0.86	4.00	1.11
	合計	63	4.41	0.73	4.41	0.75
3. 日本語の先生の教え方	下	20	4.50	0.51	3.90	0.79
	中	29	4.14	0.74	3.90	0.82
	上	14	3.50	0.94	4.00	0.96
	合計	63	4.11	0.81	3.92	0.83
4. 日本人の友達の数	下	20	4.10	0.85	3.70	1.17
	中	29	3.83	0.89	3.59	0.91
	上	14	3.57	0.94	3.71	0.99
	合計	63	3.86	0.90	3.65	1.00
5. 日本人の友達との交遊の深さ	下	20	3.85	0.88	3.55	1.10
	中	29	3.59	0.87	3.45	0.87
	上	14	3.00	1.04	3.57	0.94
	合計	63	3.54	0.95	3.51	0.95
6. 日本人の友達との会話量	下	20	3.70	1.13	3.70	1.08
	中	29	3.93	0.80	3.59	0.87
	上	14	3.00	1.04	3.64	0.93
	合計	63	3.65	1.02	3.63	0.94
7. 日本人の友達との行動範囲の広さ	下	20	4.05	0.69	3.50	0.83
	中	29	3.66	0.94	3.62	0.90
	上	14	3.21	0.97	3.57	0.76
	合計	63	3.68	0.91	3.57	0.84
8. クラブ活動	下	20	3.10	1.45	3.25	1.12
	中	29	3.34	1.32	3.14	1.03
	上	14	3.00	0.96	2.93	1.07
	合計	63	3.19	1.28	3.13	1.05
9. 日本語の授業内容	下	20	4.45	0.51	4.10	0.72
	中	29	4.21	0.68	3.79	0.94
	上	14	3.57	0.65	3.93	0.73
	合計	63	4.14	0.69	3.92	0.83
10. 学校の日本語の成績についての満足度	下	20	4.40	0.68	4.10	0.79
	中	29	3.97	0.78	3.76	0.83
	上	14	3.71	1.07	3.86	1.03
	合計	63	4.05	0.85	3.89	0.86

11. 授業への参加の割合	下	20	4.55	0.51	4.25	0.85
	中	29	4.10	0.62	3.93	0.70
	上	14	3.71	0.73	3.79	0.97
	合計	63	4.16	0.68	4.00	0.82
12. あなたの日本語能力の進歩	下	20	4.00	0.92	4.00	0.86
	中	29	3.93	0.80	4.03	0.98
	上	14	3.36	0.63	3.86	0.77
	合計	63	3.83	0.83	3.98	0.89
13. ホストファミリーとの親密度	下	20	3.90	1.17	4.10	1.12
	中	29	3.86	0.95	4.03	1.02
	上	14	3.86	1.03	3.71	0.99
	合計	63	3.87	1.02	3.98	1.04
14. ホストファミリーの世話のしかた	下	20	4.05	1.15	4.15	1.04
	中	29	4.00	0.80	4.28	0.92
	上	14	3.79	0.97	3.86	0.86
	合計	63	3.97	0.95	4.14	0.95
15. ホストファミリーでの食事	下	20	4.80	0.41	4.65	0.49
	中	29	4.28	1.13	4.24	1.02
	上	14	4.00	1.11	4.43	0.65
	合計	63	4.38	0.99	4.41	0.82
16. ホストファミリーとの会話量	下	20	4.10	1.25	3.90	1.17
	中	29	4.03	0.73	4.07	0.84
	上	14	3.79	1.19	3.71	0.91
	合計	63	4.00	1.02	3.94	0.97
17. ホストファミリーでの部屋や設備	下	20	4.55	0.60	4.35	0.99
	中	29	4.52	0.69	4.55	0.57
	上	14	4.14	0.95	4.57	0.65
	合計	63	4.44	0.74	4.49	0.74
18. 一般の日本人のあなたに対する態度	下	20	4.15	0.88	3.95	1.00
	中	29	3.76	1.02	3.97	1.12
	上	14	3.57	0.94	3.50	0.76
	合計	63	3.84	0.97	3.86	1.01
19. あなたの人間的成長	下	20	4.40	0.68	4.30	0.86
	中	29	4.24	0.79	4.24	0.69
	上	14	3.57	0.76	4.29	0.73
	合計	63	4.14	0.80	4.27	0.75

上記の表9の社会文化的適応指標は、参加留学生の日本社会文化の適応に関する指標である。大学、教室、HS、友人関係などの生活諸側面についての満足度を表している。

レベル群別に見ると、5か月目では、「6.日本人友人との会話量」と「8.クラブ活動」の2項目で平均値が中>下>上の順位になっているのを除いて、他は全ての設問で下>中>上⁽¹²⁾の順位である。日本語力の低い者の満足度が高く、高い者の満足度が低いという結果である。しかし、8か月目になると、19設問中の12項目において、平均値のレベル群別順位に変動があった。例えば、下>中>上の順位から、上>下>中（例：4、5）、下>上>中（例：6、10、15、19）のように、設問によっては、上位レベル群の満足度が高くなるという変化を示した。上位レベル群の満足度が高くなる一方で、中位レベル群の満足度が低くなっている項目が目立つ。

以上のように、「対人関係」、「環境適応」、「社会文化的適応指標」について、設問別の

得点平均値が、レベル群別に、5か月目と8か月目の二つの時期で変化していることがわかった。そこで、日本語力レベル群別と時期別の効果を見るために、「対人関係」、「環境適応」、「社会文化的適応指標」について、2要因による混合計画の分散分析の反復測定を行った。分析にあたってはSPSS20のAdvanced Modelsを用いた。その結果、異文化社会適応度の指標である三つの下位項目は表10に示される値となった。

表10 日本語力レベル群別と二つの時期（前・後）による
異文化社会適応度の2要因分散分析結果（ $n=63$ ）

		下位のレベル群 (n=20)				中位のレベル群 (n=29)				上位のレベル群 (n=14)				F 値		
		5か月目		8か月目		5か月目		8か月目		5か月目		8か月目				
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	レベル群	前・後	交互作用
異文化 社会適 応指標	対人関係と異文化適応	2.98	0.34	3.44	0.78	3.49	0.51	3.46	0.55	4.08	0.37	4.16	0.55	5.59***	9.51**	7.48***
	環境と異文化適応	3.14	0.40	3.64	0.82	3.61	0.46	3.64	0.58	4.28	0.36	4.11	0.54	1.16***	3.38†	8.23***
	社会文化的適応指標	4.20	0.45	4.03	0.50	4.01	0.41	3.93	0.48	3.59	0.62	3.84	0.50	3.35*	0.00ns	5.86***
	異文化社会適応度	3.44	0.33	3.70	0.63	3.71	0.37	3.68	0.46	3.98	0.41	4.05	0.40	4.97***	4.91**	4.14**

† $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, ns 有意差なし；主効果と交互作用における数値はF値（ $df = 2, 60$ ）

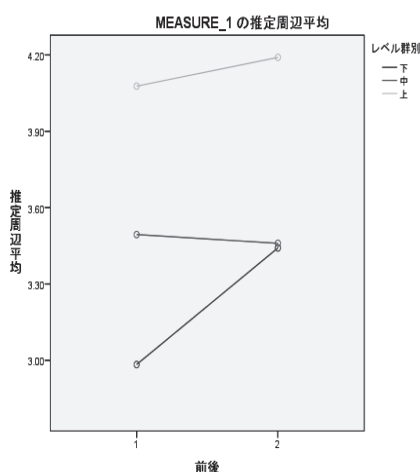


図3 レベル群別による「対人関係と適応」の平均点の変化

のレベル群間に差があった。しかし、8か月目では平均値が同じ程度の3.44と3.46に変化し、二つのレベル群間で対人関係形成の能力にはほとんど差が見られなくなった。また下位と上位レベル群は共に5か月目より8か月目で平均値が上がったが、中位レベル群では8か月目では平均値がわずかに下がり、中位レベル群の対人関係形成の能力が停滞している結果となった。一方、日本語力の上位群ほど滞日時間の長さに伴い、対人関係形成の能力が高まることが示唆された（図3）。

「環境適応」においては、レベル群別と時期別の有意な交互作用があり、各レベル群は二つの時期で異なる変化を示した。「環境適応」（ $p < .001$ ）は、レベル群別の単純主効果が有意（ $p < .001$ ）であった。レベル群別では、下位と中位のレベル群が5か月目の時点

分析の結果、「対人関係」、「環境適応」、「社会文化的適応指標」、そして上記の三つの合計得点の「異文化社会適応度」においては、全てに有意な交互作用が見られた。時期別により、レベル群別の効果が異なることが示された。

「対人関係」においては交互作用が認められ、二つの時期、すなわち5か月目と8か月目ではレベル群別のグループ間に有意（ $p < .001$ ）な差があることが示された。また、時期別による有意（ $p < .01$ ）な主効果を示した。下位レベル群と中位レベル群では5か月目では平均値がそれぞれ2.98と3.49であり、二つ

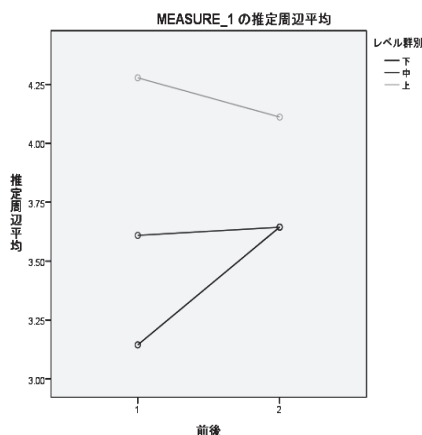


図4 レベル群別による「環境適応力」の平均点の変化

では各々の平均値が3.14と3.61であり、両者には差があった。しかし、8か月目では平均値がそれぞれ3.14→3.64と3.61→3.64になり、二つのレベル群は同じ結果となった。上位レベル群では5か月目より8か月目で4.28→4.11と平均値が幾分下がった、しかし下・中位レベル群と比較すると、上位レベル群は依然として高い数値を維持し、上位と下・中位レベル群との間にはかなりの差が認められた(図4)。時期別では、日本語力の上位の者ほど、環境に対する適応力が高いことを示した。一方で、図4に見られるように、下位レベル群の環境適応力が伸びていくことが示唆された。

た。

「社会文化的適応指標」においては、レベル群別と時期別の有意 ($p < .01$) な交互作用があった。各レベル群では二つの時期で異なる変化を示した。単純主効果では、レベル群別による主効果が有意 ($p < 0.5$) であった。すなわち5か月目では下位レベル群ほど「社会文化的適応指標」の平均値が高く、留学生活の諸項目で満足感を示した。また上位レベル群ほど平均値が低く、不満度が高いことを示した。一方、8か月目では、下位と中位のレベル群で、5か月目より各平均値が4.20→4.03、4.01→3.93と低くなる一方で、上位レベル群では3.59→3.84と平均値が上がった。レベル群別の満足感の差がなくなる方向が示唆された。

「異文化社会適応度」は、「対人関係と異文化社会適応」、「環境と異文化社会適応」、「社会文化的適応指標（日本生活諸側面の満足度）」の三つの変数を合計した平均得点より成っている。「異文化社会適応度」のレベル群別と時期別による効果を調べた結果、有意 ($p < 0.5$) な交互作用が見られた。単純主効果では、レベル群別による主効果が有意 ($p < 0.1$) であった。すなわち、レベル群別では、5か月目から8か月目には、下位レベル群が3.44→3.70、上位レベル群が3.98→4.05へと得点が高くなった。それに対して、中位レベル群では3.71→3.68へと幾分、低くなったことがわかる(図5)。中位レベル群ではやや停滞気味ではあるが、滞在時間の経過に伴

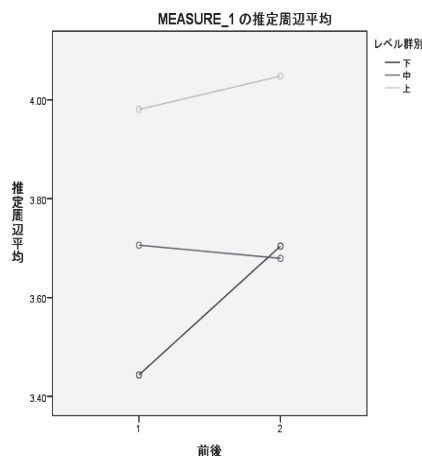


図5 レベル群別による「異文化社会適応度」の平均点の変化

い、レベル群別に、「異文化社会適応度」は高くなる傾向が示唆された。日本語力の上位の者ほど異文化社会への適応力があることが時期別に認められた。

以上の RQ3 の分析結果から、5 か月目までと 8 か月目まででは、「日本語力」のレベル群別によって、「異文化社会適応度」には相違と変化のあることがわかった。二つの時期の相違には、以下の理由が考察される。第一に、時間の経過と共に、下位レベル群の日本語力が向上したことにより、「対人関係」、「環境適応」の能力も向上したことである。第二に、「個人要因」の S・スキルの実施度が二つの時期で日本語力のレベル群別に向上したことにより、異文化社会適応度が三つのレベル群別全体で向上したと考えられることである。第三に、日本語力と S・スキルの実施度の向上に伴う、活動範囲と交友関係の広がりの変化である。特に、下位レベル群において、HS からの S・サポートと友人からの道具的 S・サポートに対する依存度が減じて、日本社会での自主的行動力が高まったことが考えられる。第四に、二つの時期の間には、上位レベル群の「社会文化的適応指標」が 3.59→3.84 と上昇して生活諸側面について満足度が高くなったという相違がある。この相違の背景には、言語の運用力が上位であることが、異文化社会で安定した生活を営む上で必要で有利であるとの留学生の評価が関係していると考えられる。

以下に、日本語力レベル群と異文化社会適応度との関係について、先行研究との関連で結果を考察する。本論の 2.6 節で Hull (1978), Heikinheimo & Shute (1986), Marion (1986), Cox (1988) の「留学生の語学能力と社会適応には正の関係がある」との知見を紹介した。この知見は本論の分析結果と一致するものであった。本論においても、適応は日本語力が上位であるほど高いことを示した。また、日本語力と S・スキルの実施度には正の相関関係があり、これまでの先行研究で述べられた S・スキルが欠損すると異文化に適応しにくいという「適応のスキル欠損仮説」(Furnham・Bochner, 1986) や、S・スキルの実施が速やかな社会文化的適応を可能にするという「S・スキルの異文化社会適応促進仮説」(田中, 1996) と本論の RQ3 の分析結果は符合するものとなった。さらに、目標言語使用環境における自尊感情は、元田 (2005) にあるように、第二言語の使用に関する不安と共に、言語能力の個人差に伴って、分かちがたく関係していることが本論の分析結果においても示された。

6. 終わりに

本論では、HS をした在日留学生を対象に、日本語力のレベル差が異文化社会適応にどう影響するかを分析し考察した。

分析の結果により、日本の文化社会に適応していくためには、日本語力の向上と共に留学生活での時間の経過が必要なことが示された。また適応のプロセスでは、日本語力のレベル群別によって相違があり、異なる変化を示すことが認められた。異文化社会適応には多要因が関係するが、本論で取り上げた適応の関連要因については、日本語力のレベル群

別と時期別の交互作用が関与し影響することが明らかになった。主効果としてのレベル群別はほとんどの適応要因に有意な水準で関係し、適応には日本語力のレベル群別が関与することが示された。以上の結果から、留学生活において、異文化社会への適応が円滑になるためには、日本語力のレベル群別の助言や指導が必要となることが示唆された。

特に、HS からの S・サポート度に対する評価には、レベル群別と時期別により、評価の変化があった。HS をした留学生は、日本語力の向上と共に、HS で得られる S・サポートへの依存から次第に自立していく傾向が認められた。しかし、日本語力上位の留学生の評価が示すように、HS に対する評価は日本の社会生活の中で安定した生活を営んでいくプロセスにおいて、異なった評価へと変じる可能性が見られた。すなわち、安定した留学生生活を支えるサポートの場としての HS に対する評価への変化である⁽¹³⁾。日本語力が高いということが、日本社会で生きていく上で活動範囲を広げる能力となると共に、安定した生活を支えるための必要条件となることが示唆された。

注

- (1) 高井 (1994:106) は、在日留学生の異文化社会適応の諸要因として、「第二言語能力、留学に対する満足度、社会的スキル能力、ソーシャル・サポートの有無、S・サポートの供給源、日本人との接触頻度、日本人の留学生に対する態度に関する留学生の認知」を挙げている。
- (2) Lysgaard (1955) により、対象参加者の現地適応過程は、異文化移行当初の至福期、低調期、安定期という心理的变化を辿るという仮説である。「U 曲線」研究とも呼ばれる。
- (3) Gullahorn & Gullahorn (1963) により、5700 人のアメリカ人対象参加者を対象に調査した結果、異文化滞在中と帰国後に心理的低調期があり、二度の低調期があることにより「W 曲線」研究と言われる。
- (4) サンプルを安定数にするために、2010 年度の学生 32 名と 2011 年度の 31 名を合わせて、合計 63 名の学生により、2 年間にわたり同一内容の調査により分析を行った。
- (5) 本論での留学生の来日時の日本語力のレベルは、日本語能力試験を基準に考えるなら、およそ、下位が N5 レベル以下、中位が N5～N4、上位が N3～N2 程度のレベルに相当すると思われる。
- (6) このスキルの下位項目には、1. 会話の機会を持つように努めた、2. 自分の感情を素直に表現した、3. 家事を手伝った、4. 家族の生活スタイルに合わせる努力をした、5. 家庭のルールを守った、6. 家族の行事 (誕生日や親戚との付き合いなど) にできるだけ参加した、の 6 項目がある。
- (7) S・スキル四「異性」は、例えば、1. 異性の人にはデートにいきなり誘わずに、まずは友達になろうとする、2. 男性はレディファーストをやらない、女性も期待しない、等の S・スキル。

- (8) S・スキル五「集団」は、例えば、一人だけ違うことをしない、自分一人の考えで物事を決めない、等のS・スキル。
- (9) S・スキル二「通念」は例えば、1. 挨拶する時は、お辞儀をして「よろしく」と言う、2. お酒の酔いを使ったコミュニケーションをよくする、3. 目上への態度や言葉使いに気をつける、等のS・スキル。
- (10) S・スキル三「開放性」は、例えば、1. 感情表現や身振りや笑い声を押えがちである。2. 呼ぶ時には、「さん」「先生」などと呼ぶ、等のS・スキル。
- (11) S・スキル六「外人扱い」は「外人扱い」への対応と説明する方が理解しやすい。例えば、1. 日本人とは下手でも日本語で通す。2. 日本人と誤解や疑問があった時にはきちんと話し合う、等のスキル。
- (12) 「13. ホストファミリーとの親密度」では、中位と上位が同一の数値である。
- (13) 留学生生活の時間の経過に伴い、留学生のHSに対する評価が、「日本語コミュニケーション能力と文化と生活習慣を学習するサポートの場」から、「暖かい家庭と家族の提供サポートの場」へと変化し、異文化適応が進んでいく。そのプロセスについては、原田（2012）に詳しい。

引用文献

- 稲村 博（1980）『日本人の海外不適応』日本放送出版協会
- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生』勁草書房
- 上原麻子（1992）「外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究」平成2年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 浦 光博（1992）『支えあう人と人～ソーシャル・サポートの社会心理学』セクション社会心理学8, サイエンス社
- スコット, P. M. (宮城薫訳) (1989) 「S・サポート」中川米三・宗像恒次（編）, 『医療・健康心理学』福村出版、200-232.
- 高井次郎（1994）「日本人との交流と在日留学生の異文化社会適応」『異文化間教育』8, 106-126.
- 田中共子（1990）「異文化におけるコミュニケーション能力と適応—ソーシャル・スキル研究の動向—」『広島大学留学生日本語教育』3, 19-31.
- 田中共子（1995）「異文化間ソーシャル・スキルによる異文化社会適応の介入研究の展開」『広島大学留学生日本語教育』8, 1-10.
- 田中共子（1996）「ソーシャル・サポート・ネットワーク形成による異文化社会適応促進仮説と介入研究—在日留学生の適応援助への示唆」『総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集』12, 89-98.
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとスキル』ナカニシヤ出版
- 原田登美（2011）「ソーシャル・サポートから見たホームステイと日本語習得—サポートが『日本語能力向上の認知』に及ぼす影響—」『留学生教育』16, 25-36.
- 原田登美（2012）「ソーシャル・サポートにおけるホームステイの有益なサポートと有益でないサポート—留学生から見たホームステイ評価」『言語と文化』16, 155-188.
- マグワイア, L (1994) (小松源助・稲沢公一訳) 『対人援助のためのソーシャル・サポートシステム』川島書店
- モイヤー康子（1987）「心理ストレスの要因と対処の仕方—在日留学生の場合—」『異文化間教育』1, 81-97.

- 元田 静 (2005) 『第二言語不安の理論と実際』 溪水社
- 八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化社会適応—国際的対人関係の構築をめざして』 多賀出版
- ADELMAN, Mara B (1988) Cross-Cultural Adjustment : A Theoretical Perspective on Social Support. *International Journal of Intercultural Relations*, 12, 183-204.
- Adler, P. (1975) The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock, *Journal of Humanistic Psychology*, 15, 13-23.
- Berry, J., Kim, U. & Boski, P. (1987) *Psychological Acculturation of Immigrants*, In Cross-Cultural Adaptation : Current Approaches, Y. Kim and W. Gudy Kunst (Eds.), Newbury park : SAGE.
- Bock, P. (1974) Modern Cultural Anthropology: An Introduction. 2nd Ed. NY : Alfred A. Knopf.
- Clément, Gardner, D.C. & Smythe, P.C. (1980) Social and individual factors in second language acquisition, *Canadian Journal of Behavioural Science*, 12, 293-302.
- Cox, J.(1988) The overseas student : *Expatriate*, sojourner or settler? *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 78, 179-184. Current Approaches. Y. Kim & W. Gudykunst (Eds.), Newbury Park: SAGE
- Deutsch S. & Won, G. (1963) Some Factors in the Adjustment of Foreign nationals in the United States. *Journal of Social Issues*, 19, 3, 115-122.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1982) Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.). *Culture in contact*. Oxford: Pergamon Press. 161-198.
- Furnham, A. and Bochner S. (1986) *Culture shock*, London: Routledge
- Gudykunst, W.B. (1993) Toward a theory of effective interpersonal and intergroup communication, An anxiety/uncertainty management perspective. In R.L.Wiseman & J.Koester (Eds.) *Intercultural communication competence* 33-71.
- Gullahorn, J. T. and Gullahorn, J. E. (1963) An Extension of the U-curve Hypothesis, *Journal of Social Issues*, 19 (3): 33-47.
- Heikinheimo, P., & Shute, J. (1986) The adaptation of foreign student : Student views and institutional implication. *Journal of College Student Personnel*, 27, 399-406.
- Hull, W.F. (1978) *Foreign Students in the United States of America: Coping Behavior within the Educational Environment*, Praeger Publishers
- Kim, Y.Y.(1988) *Communication and cross-cultural adaptation*. Clevedon, UK : Multilingual Matters
- Kim,Y.Y. (2001) *Becoming intercultural*, Thousand Oaks, CA: Sage
- Lysgaard, S. (1955) Adjustment in a foreign society Norwegian Fullbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- Marion, P. (1986) Research on foreign students at colleges and universities in the United States. *New Directions for Student Services*, 36, 65-82.
- Morris, K.(1960) *The Two-Way Mirror: National Status in Foreign Students' Adjustment*, Minneapolis: University of Minnesota Press
- Oberg, K. (1954) Cultural shock : Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- Sewell, W.H., & Davidsen, O.M.(1961) *Scandinavian students on an American campus*. Minneapolis: University of Minnesota Press
- Takai, J. & Ota, H. (1994) Assessing Japanese, Interpersonal Communication Competence, *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A (2001) *The Psychology of Culture Shock*, Routledge 27 Church Road , Hove, East Sussex BN3 2FA.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1994) Acculturation, strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 329-343.
- Whittaker & Garbarino, (1983) *Social Support Network: Informal Helping in the Human Services*. New York: Aldine

- Wilson, J., & Ward, C (2010) Revision and Expansion of the Sociocultural Adaptation Scale(SCAS R), unpublished manuscript
- Young, D.J. (1990) An investigation students' perspectives on anxiety and speaking, *Foreign Language Annals*, 23, 539-553.